妻をめとらば才たけて…

JJ1SXA/池

「妻をめとらば才たけて　眉目麗はしく情けあり　友を選ばば　書を読みて　六部の侠気四部の熱…」と与謝野鉄幹は、「人を恋うる歌」として謳い上げている、「妻をめとらば才たけて…」の歌詞と作者が「与謝野鉄幹」ということは知っているが、題名が「人を恋うる歌」→「支那浪人の歌」ということは、余り知られていないのでは無いか。

鉄幹は、才たけた妻をめとっている、と言うより、与謝野晶子が妻ある鉄幹の所へ押しかけ女房で収まったのだが…才気溢れ、情熱迸る女に押しかけられ、女房に収まったことに異論などあるはずは無いだろう、男冥利に尽きるというものだ、尤もそれだけの魅力ある男だったということかも知れないが…

私は昭和に生まれ、平成の御代を生き永らえてきたが、平成も終わろうとしている、風前の灯火といったところだが、次の時代に入ってからこの世とサラバとなるのか、平成の終わりと共にサヨナラするのか、若い頃には、「明治は遠くなりにけり」と言ったが、今は「昭和は遠くなりにけり」だ、まごまごすると「平成は遠くなりにけり」となりそうだ。

明治生まれの人たちは、現代の人とは大分違っていた、また明治の時代は結構自由だったようだ、晶子も情熱の歌人との称号を貰っているが、「柔肌の熱き血潮に触れもみで寂しからずや道を説く君」と妻ある男に迫り、「人かへさず暮れむの春の宵ごこち小琴にもたす乱れ乱れ髪」と不倫を堂々と詠っている、妻となったのは、早い話が不倫の結果だ、また、有名な「弟よ」は、「…君死にたまふことなかれ、すめらみことは、戦ひにおほみづからは出でまさね、かたみに人の血を流し、獣の道に死ねよとは、死ぬるを人のほまれとは、大みこころの深ければもとよりいかで思されむ…」、反戦歌というより天皇陛下批判の言葉が大胆に書かれているが、これをもって特に罰せられたわけでは無い、不倫も反戦も明治の時代では大問題のはずだが、矢張り歌人としての実績を買われてか、あるいは、明治という時代はそういうことだったのか、思い切り自由を謳歌している。

私は、この「支那浪人の歌」で気になる歌詞は「…われに過ぎたる望みをば　われならずして誰か知る」だ、鉄幹は才たけた妻を手に入れて、それでも他に過ぎたる望みがあったのか、その望みは何だったのか？と気になる。

高校時代にこの歌を知り、友達皆で、これが理想だと言っていたが、私を始め、「才たけて眉目麗はしく情けある妻」をめとった者は仲間内に見当たらない、理想と現実の間には、大きなギャップは当然か、高校時代を思い出したついでに一端を紹介。

1年時の担任は生物の教師だったが、植物学のある程度の権威で、牧野富太郎博士の弟子というのが自慢だった、牧野博士は「日本の植物学の父」といわれ、多数の新種を発見し命名も行った近代植物分類学の権威である、小学校中退でありながら理学博士の学位も得て、生まれた日は「植物学の日」に制定されている、担任教師は、二言目には牧野先生、牧野先生だった、そして、「君達は、偉大な牧野先生の孫弟子であることを誇りに思え」と言っていた、当時は余り実感が無かったが…

2、3年の担任は国学院大学出身の国語の教師で、芭蕉の命日等には羽織袴で登校していた、与謝野鉄幹は評価するが、「…芭蕉のさびをよろこばす…」は気に入らないと言っていた、思えば、私の学んだ高校にはユニークな教師が多かった。